

[学会]

第839回千葉医学会例会

第8回神経内科例会

日時：平成2年12月22日（土）午後2時～午後6時

場所：ホテルサンガーデン千葉（4階・白鳳の間）

1. 運動ニューロン疾患における体幹骨格筋 CT

——頭部脊椎症性筋萎縮症との鑑別——

南雲清美, 平山恵造 (千大)

運動ニューロン疾患（上肢型）と頭部脊椎症性筋萎縮症において骨格筋 CT を施行し、体幹筋（傍脊柱筋）における筋萎縮の有無、その程度を評価した。その結果運動ニューロン疾患では胸・腰神経支配の傍脊柱筋に筋萎縮および脂肪変性が見られた。特に、Vulpian-Bernhardt type は筋萎縮が著明だった。頭部脊椎症性筋萎縮症では、頸髄神経支配の髄節性の筋萎縮を認めたが、Th₁₂, L₃ 椎体レベルの傍脊柱筋には筋萎縮は認められず、両者の鑑別に骨格筋 CT は有用であると思われた。

2. slow eye movements, パーキンソン症状を伴う

運動ニューロン疾患の1例

青墳章代, 今井尚志, 朝比奈正人

北 耕平 (国療千葉東)

新井公人, 山崎正子 (千大)

症例は35歳、女性。運動ニューロン障害は、左右差のある著しい錐体路徴候が主体で、大脳脚・内包後脚 (MRI) から皮質運動野 (SPECT) に至る病変が捉えられた。眼球運動障害は Parinaud 徴候, slow eye movement が特徴で、中脳・橋被蓋の核上性病変が推察された。Parkinson 症状は L-DOPA が有効な筋固縮と寡動が主体で、黒質緻密層狭小化 (MRI) から黒質病変が示唆された。本例は錐体路・錐体外路・核上性眼球運動系が共に強く障害された特異な変性疾患と考えられた。

3. 脊髓鏡の有用性について

坪井義夫, 上司郁男 (千葉労災)

癒着性くも膜炎の54歳女性と、脊髓血管異常が疑われる53歳男性の2例に脊髓鏡を施行した。くも膜の肥厚、白濁や脊髓後面の髄外血管が近接し観察可能であった。脊髓鏡は馬尾、胸腰髄後面、頸髄前面が可視領域となり

馬尾の癒着・肥厚・萎縮や腫瘍、嚢胞の存在、神経の圧迫の状態の観察の他、馬尾、脊髓表面の血管の観察に優れている。今後の脊髓疾患への応用が期待される。

4. 再発性脊髓内出血

——脊髓海綿状血管腫の画像と治療——

竹中英子, 古本英晴, 篠遠 仁

(千大)

亜急性の経過で、左 C₇ 不完全 Brown-Séquard 症候群を呈した再発性脊髓内出血の47歳男性例を報告した。血液凝固能に異常はなく、脊髓血管造影でも異常血管を認めなかった。MRI 上慢性期に至った多数の潜在性血腫がみられたため、海綿状血管腫を疑い手術療法を施行した。術後、軽度後索症状が出現したが自覚痛は消失した。再発性脊髓内出血の病態の把握に MRI は有効であり、またその治療として手術療法も考慮すべきであると考えた。

5. 病初期に脳波上 PSD を呈した日本脳炎

菅宮 斉, 栗原和男

(千葉県救急医療センター)

渡辺義郎, 佐藤 章

(同・脳神経外科)

朝比奈正人 (国療千葉東)

症例は39歳、男性。8月下旬疲労感と39°C の高熱で発症。来院時は半昏睡。項部硬直、四肢の Rigidity 強く、深部腱反射亢進。髄液所見はリンパ球優位の細胞増多、糖正常。血清・髄液ウイルス抗体価上昇から日本脳炎と診断。来院後急速に意識障害が進展し、後弓反張が現れ、呼吸障害が増悪した時に脳波上 PSD を認めた。主座病変は大脳皮質および皮質下と考えられる。日本脳炎においても病初期に脳波上 PSD を認め得ることを報告した。